
クロス

ナオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス

【Nコード】

N0395Z

【作者名】

ナオ

【あらすじ】

少女には、決して誰にも知られたくない秘密があった。首に掛かるクロスだけが知る、忌まわしい過去。癒すことのできない心の傷を抱えた愛美は、優しい実の兄に禁断の想いを寄せるようになる――。

小説サイト『Berry's Cafe』に掲載、完結した作品と同じものです。

母から兄の名を久しぶりに聞いたのは、六年生の夏だった。

「だからね、あんたはそこに行っても一人じゃないのよ。施設には他にも親のいない子どもが沢山いるの。今の世の中、別に珍しいことじゃないでしょ？ 父親が違ってても兄さんがいるんだから他の子よりましだと思わなきゃ」

古びたアパートの部屋の畳に座り、ひんやりした壁に背をつけて膝を抱えた私の裸足のつま先を、ガラス窓から差し込む沈みかけた太陽の濃い朱色が染めている。

夏の太陽のその強すぎる赤は、鏡に向かう母がいつも指でさす口紅の色に似ていた。

「お母さんは迎えに来てくれる？」

朱色の光から逃れようと抱えた膝を引きつけたが、こここのところ急に膨らみを増した胸が邪魔をする。

この頃では同じクラスの男子だけではなく、もっと大きな学生や大人の男の人までが私の顔と胸に視線をとめるようになり、それが恥ずかしくて嫌でたまらなかった。

「それはね、あんた次第よ」

母は化粧を終えると、レースのついたスリップの上に花柄の薄いワンピースをはおり、ほっそりした身体に似合わないほど豊かな胸を強調するように、胸元の開きを両手でぐっと引き下げた。

鏡の中の自分を熱心に見つめたまま、明るい色の茶色い長い髪を少し乱暴に梳かす。

「あんたが母さんの幸せを願えるいい子になればね。嘘つきを直すいい機会よ」

母は手を止め、鏡の中から一瞬私を見つめた。

こんな時の母の目は、私をいつも落ち着かない気持ちにさせる。母の冷たい視線が耐え切れず、私は言葉もなくうつむいた。

狭い玄関で、手早に細くて高いヒールのサンダルを履いた母は、振り返らずに私に言った。

「いい？ 誰が来てもドアを開けちゃだめよ。お母さんは留守だからって言いなさい。わかったわね？」

「はい」

早く帰って来てねという言葉が無理やり飲み込む。

錆び付いたドアが閉まり、私は夕暮れの部屋にひとり取り残された。

幼い頃から繰り返された日常。

母が出て行った後、私は家の鍵を閉め、小さな折りたたみのテーブルに向かって算数の宿題を始めた。

窓の外からは、男女がお互いをからかう笑い声が聞こえている。

私は立ち上がり、人が行きかい始めた路地側のカーテンを閉めた。

私は夜のこの街が好きではない。

クラスの子の一部には大きな少女のように繁華街に遊びに出

る子もいたが、私はそうしたことはなかった。

暗闇に輝くネオンは、なぜか私を不安な気持ちにさせる。

母は私が遊び歩くことや、言葉遣いを乱暴にすることを好まないのも知っていた。

「私と同じになるんなら、ここから出て行きなさい。自分の最低な人生を繰り返し見せられるのはごめんよ」

こうして一人で計算問題を解いているのが好きだった。
その時は何にも考えずにいられるから。

あたりがずいぶん暗くなってきたことに気付いたのは、それからしばらく経った頃だ。

台所に置いてある菓子パンを食べようと教科書を閉じた時、ドアをノックする音が聞こえた。

心臓が大きく鳴り、身体が強張る。

手が冷たくなっているのがわかった。

「愛美！」

ドアの外から男の声が聞こえる。

私は狭い部屋の隅に身体を屈めてうずくまり、両手で強く耳を塞いだ。

もっと早く明かりを消していればよかった。

眠っていたと言えたのに。

耳を塞いでいても聞こえるほど、ドアを叩く音が大きくなってくる。

隣の部屋の女の人が「うるさいから何とかしな！」と、壁に物を投げつけて怒鳴り声を上げた。

私はやっと立ち上がると、ドアの内側から母の恋人に言った。
身体が震えている。

「母は仕事に行きました。だからまた明日来て下さい」

「酔っ払ってふらついてんだよ。水を一杯飲ませてくれたらすぐ帰るからさ」

「でも、お母さんが誰も入れちゃいけないって……」

「知らない奴をつてことだろ？ 俺とお前のお袋の仲なら、お前の親父みたいなもんじゃねえか。身内だぜ？ 身内」

言葉を返せずにいたら、男は急に声を荒立て、ドアを力任せに蹴り始めた。

「愛美！ 俺を邪険に扱ったってお前のお袋に言いつけるぞ！ いいんだな！」

これ以上ドアを開けることを拒んだら、何があつたか近所の人の口から母に知れてしまう。

私は震える手でドアを開けた。

「最初から素直に言うことを聞けよ」

母の若い恋人は、なだめたり怒鳴ったりするいつもの手段で部屋に上がり込んだ。

かすかに漂うアルコールの匂いで吐きそうになり、手で口を押さえる。

男は少し前からこうして母が留守の時に部屋に上がり込むようになった。

最初の頃は勉強する私の後ろから肩に触れたりする程度だったが、その行為は回を増すごとにエスカレートしていく。

この前は後ろから抱きつかれ、服の上から痛くなるほど胸を触られた。

たまたま気分が悪くなっていたよりもより早く帰ってきた母がアパートのドアを開けた時、男の手は私のＴシャツとスカートの中を執拗に弄っていて、それを見つけて取り乱した母はヒステリックに泣いて私の頬を打ちつけた。

「こいつが誘ったんだ。ガキのくせに娼婦みたいな目で。末恐ろしい女だぜ」

母よりいくつも年若い恋人はそう言い、否定する私を嘘つきと母は罵った。

「その年で母親の男を寝取ろうとするなんて！ あんたは自分が綺麗だとも思ってるの？ あんたみたいな嘘つきは、その汚い心が全部顔に出てるのよ。いい？ あんたは誰よりも醜いってことを覚えておきなさい」

母が叫ぶ声が耳に木霊する。

母は付き合っている男達にいつも強く独占的な愛情を求めた。

相手の心を全て手にしないと不安に取りつかれ、眠れなくなってしまうのだ。

そして、相手に愛情がなくなったと知るや、その強い愛と同じ分だけ憎悪する。

夜一人で泣いている母の姿を何度も見た。

幼い私は、母のその震える細い背中が、ただ哀しくてたまらなかった。

「愛美。布団を敷けと言ってる。早くしろよ！」

立ちすくんだまま動けない私に強い口調で命令すると、男はデニムのポケットからライターを取り出して、イラついたように煙草に火をつけた。

体を屈めるようにライターを何度もカチカチといわせて。

黒いタンクトップから覗く胸に、蛇の絡まった銀の十字架が掛かっている。

私には、そのクロスが母の人生のように見えた。

私は男の目から逃れるように背を向け、押し入れから布団を出して色あせた畳の上に敷いた。

母の恋人が怒ってここから去ってしまったらという不安で頭が一杯だった。

すぐに男が私に抱きつき、身体をまさぐり始める。

男に服をはぎ取られているときも、薄い布団の上に押し倒された時も、私は声を上げなかった。

01-1 (後書き)

ラストまで、できるかぎり日々更新していくつもりです。よろしく
お願いします。

顔をそらす私の顎を乱暴に掴み、男がまっすぐに目を見つめながら低く掠れた声で言った。

「瞼を閉じるな。最後まで俺を見てろ……。これからお前が俺にされることを、しっかりと記憶に刻みつけておけ」

まだ昼の暑さがけだるく残る部屋の中で、母の恋人は私を執拗に抱いた。

初めての痛みにさいなまれる時間がのろのろと過ぎていく。
冷めない悪夢にいるのだと思うことすら許されなかった。

男が乱れる私の髪を掴み、この行為が現実であると知らしめる。

かなわぬ力で拘束されている間、私は一つ違いの優しい兄のことをぼんやりと考えていた。

最後に会ったのはいつのことだっただろう。

兄は今、どうしているのか。

私を思い出してくれることがあるだろうか。

兄と手を繋ぎ、二人で体を寄せ合って眠った小さな頃の記憶に心を預けた。

誰よりも私を愛してくれた兄――。

兄と私は父親が違う。

兄の父は日本名を持つ混血の南米人で、母と知り合った時には有名なサッカークラブに所属する選手だった。

母は当時働いていたバーで来日していた兄の父と知り合い、後を追うようにかの地へ渡って兄を産んだ。

兄の父親と母は不思議な関係にある。

入れ替わり立ち代り男が出入りする中で、兄の父だけが母の人生に深く絡みついていた。

母もまた日本とフランスの混血で、早くに父を、そしてその後に母を亡くしていた。

貧しい環境に育だち、天涯孤独の身の上だったのは兄の父も同じだ。

同じ境遇の二人はお互いに共有しあえる特別な感情があったのかもしれない。

兄を産んだ一年後、母は日本から南米へ赴いていたジャーナリストとの間に子どもを身ごもり、日本に戻って私を産んだ。

母は肌色に父親の面影を残す小さな兄を施設に捨てたが、結局私の父とは一緒になることはなく、私の記憶に父親の姿はない。

母は兄の父親と時々縁りを戻してはしばらく一緒に暮らした。

傷害事件を起こして足に大きな怪我を負い、選手生命を失った兄の父が、仕事を探して日本に来ていたからだ。

移り気なマスコミから仕事をもらえたのは、ごく初期の頃だけだった。

もともと激しい気性で行動に問題があった兄の父は、成功していたときのプライドを捨てられず、荒れて暴力事件を起こしてはそのたびに追いつめられていった。

結局仕事にも日本にもとけ込めないまま都会の片隅で埋もれるように暮らし、自堕落な生活を送りながら母の稼ぎを当てにするようになる。

そして、二人が家庭のまねごとをする間だけ、兄は施設から呼び出され、家に引き取られるのだ。

兄の父親は大きくて怖い人だったという記憶しかない。

足を思つように動かせない苛立ちは、すべて母と小さな兄への暴力に変わる。

自分が置かれた状況への怒りが、母への猜疑心や嫉妬心になったのだ。

母の勤め先に押しかけ、客にすら暴力を振るう。

母だけに頼る生活は、そうしてますます苦しさを増した。

繰り返される暴力と二人の言い争い。

母は父との争いを、父親の血を濃く引いた兄を愛さないことで報復した。

それが、肉体への暴力以上に兄の心を傷つけた。

それでも兄は父と母を慕っていた。

機嫌のよい時は熱心にサッカーを教えしてくれる強く大きな父と、ふと母親らしい態度を見せる誰よりも美しい母。

気まぐれに愛と暴力を繰り返す事が子どもにとってどれほど残酷な仕打ちであることが。

いつそ暴力だけならいい。

兄には親を憎む逃げ道すら与えられなかったのだ。

誰にも見られないように布団の中で泣いていた兄の姿を思い出すと、今でも身を切られるように切なくなる。

兄を慰めてあげたかった。

けれど幼い私にできるのは、ただ背中を丸めて嗚咽している兄に寄り添って一緒に眠ることだけだった。

誰よりも心優しい兄を幸せにしてあげられたら。

まるで心を持たない人形を気まぐれにゴミ箱に投げ込むように、

実の親から何度も捨てられた兄。

いつか自分を愛してくれるのではと願う彼の気持ちは、その度無惨に打ち碎かれ、母は兄の存在を記憶のかなたに押しやった。

首に銀のクロスを掛けたこの独裁的な母の若い恋人は、私の中で兄の父と重なる。

「今日はこれでやめてやるよ。風呂場で身体を流して来い」

行為を終えると、母の恋人は私をまだ組み敷いたままそう言った。男の顎を伝った汗が私の目に落ち、その痛みに驚く。男の汗は、私の目から涙のように頬に流れ落ちた。

男はようやく私を離し、そのまま身体をずらしてすぐに煙草に火をつけた。

「このシーツはあいつに見つからないように捨てておけ。いいな？」

「……はい」

白いシーツに残る鮮血の跡が何を意味するのかさえ、よくわかっていなかった。

身体を中心に焼け付くような痛みを感じながらやっと立ち上がり、歩き出そうとした途端、驚いて足を止めた。

身体の中から流れた何かがどろりと太ももを伝う。

男は布団にうつ伏せで腕をつき、震える私を肩越しに振り返って低く笑った。

「今度からはちゃんと気をつけてやるよ。それはお前に俺を刻み付けた証だ」

母の恋人の私への行為は、一晩では終わらなかった。その夜からお腹の鈍い痛みがなかなか癒えず、私は母の恋人が来

る度にそう訴えたが、男は行為を何回も繰り返せば治っていくのだと言って一層執拗に求めてくる。

最初の言葉通り、行為中に私が目を閉じることを、男は決して許さなかった。

男が私の目を見つめ、低い声で言う。

「お前の目に、俺が映っている。汚されて憎いだろう？　俺を憎め、愛美……」

まるで、何か見えない影に追われているかのように、男は私を抱きたがった。

母が家から出るの見計らうと、夜も更けないうちから頻繁にドアを叩く。

母の留守を待ちきれず、学校の帰りに待ち伏せられて知らない場所に連れ込まれることもあった。

母と三人で家にいる時には息が詰まりそんな緊張で食事が一口も喉を通らない。

母が席を外したほんの数分の間すら、男は私に手を伸ばすのだった。

「あいつに言うんじゃないぞ。バレたらあいつは泣くし、俺は金が入らなくなる。お前のせいで皆を不幸にするのは嫌だろ？」

母に訴える事など、考えたこともなかった。

それどころか、知らなければいいと必死で願う。

母が私と恋人の関係を知ってしまえば、その時私は捨てられてしまうのがわかっていたからだ。

今の恋人ができてから、母は私を施設に入れることを頻繁に口に出すようになっていた。

始めて母が恋人をアパートに連れて来た時、男はいつまでも私を見るのをやめず、母とそのことで口論しているのを聞いたことがある。

「あの子に絶対に手を出さないで」

隣の部屋から母が恋人にそう言っているのが聞こえた。

「焼いてるのか。俺はガキなんか興味ねえよ。お前にそっくりでつい見とれただけさ」

「もし手を付けたら許さない」

「俺を？ それともお前の娘をか？」

男が低く笑ってそう言い、二人の会話が途切れていく。

「……俺と別れられるのか」

「施設に入れようと思ってるのよ……」

母が途切れ途切れに男に言う声が聞こえる。

「愛美はお前の娘だろ……。ここにおいて置けよ。な？ 俺はもうあいつを自分の娘みたいに思ってたんだよ……。俺が欲しい女はお前

ただだ。わかるだろ……」

私は布団をかぶり、隣の部屋から漏れる声から耳を塞いだ。幼い頃から繰り返し聞かされてきたその声は、どれだけたっても慣れることなどできなかった。

男の行動は日々大胆になっていき、私への行為は日常的になった。私は母に秘密を知られたらと怯え、学校では同じ年の少女達と無邪気に話すことができなくなっていた。

私は皆と違ってしまったのだ。

私が汚れていることを誰もが見透かしている気がして、顔を上げて目を合わせるのが怖い。

小さなクスクス笑いや内緒話が聞こえると、私の秘密を噂されているような気がして身体が凍りつく。

どこにいても不安で落ち着かず、自分の居場所がない気がした。自分に苦しみを与える男から逃げることにすら思いつかなかった。ただ自分を消し去ってしまいたいという想いだけが日々募っていく。

男はある日、いつものように私を抱いた後、自分の首にかけた銀色のクロスを取り、裸のままの私の首につけて言った。

「外すなよ。これはお前の烙印だ。どこにいてもこのクロスから逃れられない。お前はこの先もずっと俺を思い出し続けるんだ。たとえ俺が死んでもな……」

四カ月後、私は学校で高熱を出して倒れ、病院に運ばれた。

私は小さな頃から傷や風邪の治りが遅く、微熱が続いてはよく学校を休んだ。

免疫機能に少し問題があるとわかったのはその時だ。

身体のどこの傷から発生している熱なのかを医者が母に説明した時、母はベッドに横たわる私を冷ややかに燃える目で見つめていた。

「そのクロスはお前が私を裏切った証よ」

母はそう言い捨て、私から目を背けた。

退院後、母が施設の近くまで私を連れて行き、「ここからは一人で歩いていくのよ。母がもうずっと家に戻りませんって出てきた大人に言えばそれですむから」と言った時にも、私はただその言葉に頷いただけだった。

白いワンピースを纏った母の後姿の記憶は、実感のない幻のようだ。

これはただの夢で、いつか目を覚ますことができるのだと、そう信じていたかったのかも知れない。

施設の事務所の中で大人たちが眉をひそめて私の処遇を話し合っている間、廊下に出されて小さな窓から見える殺風景な外の景色を眺めていたら、背の高い浅黒い肌をした少年が歩いてきて、戸惑ったように私を見つめた。

「愛美……？」

記憶にあるよりずっと低い、優しいハスキーボイス。

「どうしてここに」

数年の時を経て、兄が私を見間違える事はなかった。

兄の聡明な黒い瞳を見た途端、安堵のあまり涙がどつと溢れ、私は声を上げて泣き出した。

「陸人……陸人……」

兄の名を繰り返し呼びながら、ほっそりした身体にしがみ付いて泣き続けた。

暗く冷たい施設の廊下にいることすら忘れるほど、陸人が私の身体に回してくれた手は暖かった。

それから数週間がたった時、男が刺されて死んだことを、誰かが見ていたテレビのニュースで知った。

大量の麻薬が関係した事件だということだった。

私の首にかかるクロスを外してくれる男はもうこの世にいない。

そして、死すらクロスから自分を解き放ってはくれないことを、

その時私ははつきりと知ったのだ。

施設は日向園といい、私や陸人と似たような境遇の子どもたちが集まっている、街外れの古く殺風景なコンクリートの建物だった。未就学児童から高校生までが全部で二十五人収容されている小さな施設だ。

錆びた鉄の門を通って中央玄関に入ると中央に管制室と食堂があり、その両側が女子寮と男子寮に分かれていた。

男子が十六人に対し女子が九人だったので、女子寮の方には少し余裕があり、一部屋が一人か二人に割り当てられている。

管制室からはそれぞれの棟へ細い廊下で繋がっており、監視が行き届いてさえいれば、男女は玄関での出入りと食事以外で顔を会わせることはないはずだった。

園長、副園長のほかに指導者が名目上は四人いるが、最年長の少年達の素行に恐れをなした職員の退職が相次いでいて、施設は常に手不足状態にある。

施設内は、世間での評判以上に荒れていた。

食堂には当たり前のように灰皿が置かれ、窓ガラスは常にどこかが割られている。

ほとんど面会者が訪れることのない施設で、子ども達の心は荒れ、行き場のない怒りに満ちていた。

年長の少年は不登校が多く、彼らの間には常に暴力行為を含む争いが起こっていて、それを制止する力を持つものがいなかった。

他の施設がどのようなものかは知らない。

子ども達が心から安心できる環境の施設もあるのだろう。

けれど、私が知っているのはこの日向園だけで、ここではそれが日常だった。

おそらく、私が置かれていたのは誰が見ても劣悪な環境だったのだと思う。

それは、自分がどこに住んでいるかを話した時の回りの反応でもわかる。

そんな状態であつても、私は施設での暮らしを辛いと思うことはなかった。

毎日決まった時間に食事が摂れ、ベッドで眠れる。

もともと豊かな生活を知らなかったこともあるが、何日も一人になつたり、男がドアを叩く音に怯えずにいられるのが幸せですらあった。

そして何より、そこには陸人がいた。

日向園で暮らすようになってから四ヶ月が過ぎ、私はもうすぐ中学一年、陸人は二年になる春を迎えていた。

施設の狭い庭には細い桜の木がほんのりと色づいた花を咲かせている。

まだ少し風は冷たいが、日差しの暖かな日だった。

陸人がブロック塀に寄りかかるように立っている私の顔を覗き込むようにして聞いた。

「誰かお前に手を出してくる奴はいないよな？」

唇の端にはまた新しい傷ができている。

常に私の身边に気を配っている彼の身体から、この四ヶ月間生傷

が耐えたことはなかった。

力のある者がここでの権力を持つ。

私が施設に入ってしばらくしてから、下校の途中で施設の少年に待ち伏せされ、絡まれたことがあった。

陸人が初めて身体に争いの傷をつけて来たのは、その夜のことだ。数日経つと、食事の時、他の少年が陸人の回りの席を遠慮がちに空けるようになった。

陸人より年長の少年達でさえ。

以来私は手出しをされるどころか、少年たちと目が合うことすら稀になった。

陸人は年長の少年に負けない程の体格と敏捷さを持っていたが、どうやって私を守っているのかは決して口に出さなかった。

私が来てから陸人は別人のように変わってしまったと、同い年の少女が口に出したことがある。

だが、優しく穏やかな兄の姿しか見たことがない私は、他の人が彼をそれほど恐れる理由を、どうしても納得することができなかった。

「大丈夫。全然怖いことはないわ」

他の少年たちに、部屋の鍵をかけずにいることを強要されている少女がいることも、陸人の庇護の下に置かれた私は知らないでいた。

「もし誰かに少しでも何かされたら隠さずに言うんだよ。いいね？」

「うん……」

陸人は厳しい表情を緩め、ようやくいつもの優しい笑顔を見せた。

「ごめん。怖がらせたね。そんな顔するなよ。愛美は可愛いんだから、もう少し笑ったほうがいい」

私を喜ばせようと、陸人がいつもの様にサッカーボールを手に持っている。

陸人がサッカーボールを使って遊んでいるのを見ているのが好きだった。

まるでマジックのようにボールを操り、いつも驚くような曲芸を見せてくれる。

「私、可愛くなんかない」

私は母の言葉を思い出し、小さな声でそう言った。

誰にも自分の顔を見られなくなかった。

私は嘘つきだ。

病院で母に、誰に抱かれていたのかと問い詰められた時も、最後まで母の知らない男だと答えた。

そうして私はいくつもの嘘を重ねる。

「違う。愛美は綺麗だよ。綺麗過ぎるんだ。それを知っていなきゃならない」

真剣な声で陸人は言った。

「愛美にはまだわからないことだけど、自分の外見が最低の奴らを卑劣な行動に駆り立たせることがあるって覚えておくんだ。ここにいるといつもその危険に晒されるし、これからはもっとそうになってく。愛美をあいっらの手で汚したくない」

私はその言葉に曖昧に頷いた。

陸人は私がもうどれほど汚れているかを知らない。

母の恋人に行為を繰り返されていくに連れ、最初に感じていた痛みは徐々になくなっていった。

初めての時、男が言った通りに。

身体を支配する感覚は違うものになりかけていたのだ。

男が生きていてあの関係が続いていたら、私はどうなってしまったのだろう。

その記憶が今も私を苦しめる。

——お前はもつと自分の身体が変わっていくのを知るんだ。そのうち心も身体に支配される。あいつの娘だから、その血が流れてるのさ——。

男はそう言っただけで皮肉に笑った。

私はどんどん穢れていくのだ。

こうしている間にも、何か恐ろしいものが身体を蝕んでいく気がする。

恐怖で身体が強張った。

ふと気がつくと陸人が私の顔を見つめていた。

「大丈夫だよ、愛美。俺が絶対に守ってやる」

力づけるように、陸人はそう言った。

それからいつものように指先で器用にボールをくるくる回すと、それをひょいと後ろに投げて踵で蹴り上げる。

「さて、ボールはどこでしょう」

陸人は悪戯っぽい表情で私を見ると両手を前に突き出した。
ボールは影も形もない。

「すごい。どこ？」

驚いて見ている私にくるつと背を向けると、陸人は背中のＴシャツの中にぽっこり膨らんで収まっているボールを見せた。
ボールで膨らんだＴシャツにはマジックでおかしな顔が描いてあって、陸人が動くとも顔も笑っているみたいに見える。

「やだ。おかしい」

思わず吹き出して笑ったら、そのまま腹話術みたいにボールがしゃべった。

「誕生日おめでとう。愛美」

それから陸人はこつちを振り返り、ポケットから熊みたいふわふわした白い犬の縫いぐるみを出して私に手渡した。

首に赤いリボンを結んでいる。

「ほら。欲しかったんだろ？」

「そうなの！ 可愛い……。けどこれ、ドーナツショップの景品でしょ？ どうやって」

「盗んだんじゃないぜ。学校の帰りに毎日店の前で落ちてるカードを探したんだよ。景品引き換えの期間が終わるまでに点数が集まるかひやひやした」

「そうだったの。ありがとう……」

涙が込み上げて、目の前の陸人が霞んで見える。

母と暮らしていた頃は、泣く事をいつも我慢していた。

私が泣くと母は途端に機嫌が悪くなり、ただでさえ疲れているのにこれ以上辛気臭い顔を見せられるのはうんざりだと声を張り上げる。

私は母の機嫌を損ねないように、迷惑をかけないように、感情を押し殺し、息をひそめて日々を過ごしていたのだ。

「今日の愛美の涙用のハンカチ。洗濯済み」

陸人はそう言って、いつものように私にハンカチを差し出した。

「アイロンまでかけてある」

「誕生日だから特別仕様だよ。家庭科の時間にしっかりかけといたんだ」

私が泣き笑いすると、陸人は笑ってそう言った。

陸人の前では泣くことに怯えずにすむから、私はいつの間にかすっかり泣き虫になってしまったようだ。

暖かく、優しい兄。

施設内での恐ろしい噂など、どうして信じられるだろう。

私は兄の聡明な黒い瞳を見つめていた。

春の風に、陸人の黒髪が揺れている。

「なんだよ。寝癖でもついてる？」

陸人にそう言われて、自分が知らずに兄の髪に手を伸ばして触れていたことに気がついた。

「桜の花びら」

私は動揺した心を押し隠すように、陸人の髪から桜の花びらを取って手のひらに乗せるとそれを見せた。

こうして一緒にいると、いつも不思議な感覚で胸が締め付けられる。

それがいったい何なのか、その時の私にはまだわからずにいた。

「綺麗ね」

「愛美に似合うよ。愛美ほど綺麗な子は、どこにもいない」

陸人は私を真っ直ぐに見つめてそう言った。

私の手から花びらをそっと取ると、それを私の頭に置いて微笑む。

陸人といると、自分の中にある汚れたものが全て流れ出して行くように思えるのだ。

この荒れた施設の中で一番の力を持つ少年は、私の前では小さな時から変わらぬ優しい兄だ。

もし幸せな家庭があつたなら、陸人はきっと穏やかで幸せな一生を送れたはずなのに。

陸人は少し高めのコンクリートの塀に簡単に登ると、私の手を引き上げて一緒に塀の上に乗せてくれた。

川原のずっと向こうの高台にある高校が、緑の木々の間から煉瓦の頭を覗かせているのが見える。

「あそこに見える高校のサッカー部は昔すごく強かったんだ。このボールはその部員の人達が寄せ書きしてくれたものなんだよ。もう何年も前だけどね」

陸人は私にそう言って懐かしそうに遠くを見つめた。

「高校はあそこに行くの？」

私が聞くと陸人は横に首を振った。

「たぶん華南だと思う。華南の中等部からサッカー部に入らないかって誘われてるから、そこに行こうと思うんだ……。この辺では最高レベルのサッカー部だからね」

「華南ってどこにあるの？」

「街の中心だよ」

「ずいぶん遠いね。通うの大変そう」

陸人は塀に腰掛け、私を横に座らせるとしばらく黙って考え込み、ようやく口を開いた。

「愛美。俺、四月から華南の寮に入るよ。サッカー部に入るにはそれが条件だって言われた」

「ここを出るってこと……？」

ショックですぐに言葉を返せなかった。

陸人と離れることなど考えられない。

「愛美。落ち着いて聞いて」

陸人は私の肩を抱いて、一言一言言い聞かせるように落ち着いた声でゆっくり話し出した。

「こんな所を早く出なくちゃいけない。愛美をここにいさせたくない。俺らみたいな育ちの奴がその先どんな暮らしをするようになるか、今までずっと見てきた。

サッカーで少しでも早く稼ぐようになりたいんだ。サッカーは実力が全ての世界だから、プロのスカウトも常に注目するような有名校で名を上げる必要があるんだよ」

確かに陸人が持っているサッカーの才能は稀有なものだ。

地元の中学へ通っている今ですら、その突出した才能が話題を集めていた。

何度か応援に行った試合でも、みんなが息を飲んで陸人を見つめていた。

誰よりも足が速く、楽々とボールを操り、大胆で正確なシュートを決める。

陸人は、間違いなく特別なものを持って生まれている。

それだけが、彼の父が陸人に与えた唯一の贈り物だった。

「陸人と離れるなんていや。このままでいいの。陸人と一緒にいれるならここがいい」

「何言ってるんだ。ここがどんな所だかわかってるだろ？ 俺だけならいい。でも、愛美はもつと幸せな家庭に暮らすべきなんだ。親がそれを与えてくれないなら俺がきつとここから救い出す」

「怖い。お願い。どこにも行かないで」

私は陸人にしがみ付いたまま言った。

身体の震えが止まらない。

陸人がこの小さな世界から飛び出し、私のもとに永遠に戻ってきてくれない気がした。

陸人を失ってしまったら、私にはもう何も残らない。

「心配しないでいい。玖出に話をつけてる。あいつが俺が出た後この施設を取り仕切る。誰にも手出しはさせない」

ただ涙が流れて言葉を上手くつなげなかった。

陸人は気付いていないが、サッカー選手だった父親を今でも慕っ

てその影を追い続けているのがわかっていた。
陸人を止めてはいけないのだ。

「うん……」

私は頷いた。

「私、待つてる。陸人が迎えに来てくれるのを待つてるね……」

それからしばらくして陸人は華南に編入し、何年も暮らした日向園を後にした。

陸人が施設を出た後、玖出という陸人より一つ年上の少年が一番力を持つようになった。

この施設に入ってもうすぐ二年になろうとする彼は、まるで触れれば怪我をしてしまう、鋭利な刃物の様だ。

誰もが彼を恐れ、むやみに近寄るものはいなかったが、私は彼が嫌いではなかった。

玖出のほっそりした背の高い体つきは少し陸人に似ている。

陸人とは同じ部に所属していて、彼が陸人を認めていたのはその際立ったサッカーの才能によるところが大きかった。

不登校の少年が多い中、彼らが学校へ通い続けたのはそのためだ。彼らにとってサッカーは聖域で、それだけが救いのない彼らの人生の光だったのだ。

彼は陸人との約束通り、他の少年が私に手を出すことを決して許さなかった。

その当時施設の中で、私は一番安全な環境におかれていたと思う。

「今の中学には卒業までいるの？」

私は誰もいない施設の食堂で玖出の隣に座り、彼の横顔を見て言った。

金色に透けた長めの髪といくつかつけた銀のピアスが、驚くほど端正な顔によく似合っている。

玖出の髪や肌はもともと色素が薄い。

瞳の色も黒ではなく、透き通るグレーのガラスのようだ。

だが、彼が自分の美しい容姿を好まず、あえて髪を冷めた色に脱色しているのを知っていた。

自分の容姿を憎んでいるように感じることにすらある。

彼は私と同じように他国の血が混じっていて、そのせいか私達の顔立ちには不思議な程よく似ていた。

血の繋がった兄の陸人とはまったく似ていないと言われるのに、玖出という兄妹が双子に間違えられる。

彼の左腕には大きな十字架の刺青があった。

家を飛び出す前に養父につけられたのだと言っていた。

私達は二人とも、逃れることのできないクロスを持っている。

「もう少しで卒業だから、それまで今の学校のサッカー部をやめたくない。昨日華南のスカウトから誘われたよ。このまま大きな問題を起こさなければ、高校からは華南でやれそうだ」

誰ともほとんど話をしない玖出は、私にだけこうして自分のことを話す。

私も、彼と二人でいる時だけ、ここが荒れた施設の中だということをおぼえていた。

陸人がそうだったように、玖出もまた私の前では穏やかな表情しか見せたことがない。

「サッカーって楽しい？」

私が聞くと玖出は少し笑った。

「どうかな。生きてるって感じるよ。お前の兄貴もそうじゃないか？」

いつもは冷めた彼の顔に優しい笑顔が浮かぶ。

大人びて見える少年が、年相応に見える瞬間だ。

私は彼の笑顔を見ると心が温まり、陸人がいない寂しさを少しだけ紛らす事ができた。

「華南だと陸人と同じね。ずいぶん強いサッカー部だって聞いている」

「まあね。あそこに入ればプロへの道は近い。お前の兄貴は凄いや。あれ程の才能を持った奴を見た事がない。高校で一緒にやれたらいいと思うけど、あいつはもっと強いところに引き抜かれそうだ」

玖出はそう言いながら私を引き寄せ、ためらいがちにそっとキスをした。

そうされることは嫌ではなかった。

玖出のキスは母の恋人と明らかに違うものがあつたからだ。

陸人がいなくなつてから一年近く立っていたが、彼はいつもこうして遠慮がちに唇を重ねるだけで、それ以上のことを無理に強要してくることはない。

それは私を安心させていたが、玖出の心の奥に秘められたものが気になつてもいた。

彼の態度には、陸人との約束以上に何か深い理由がある気がしてならなかったのだ。

玖出はいつも私に対して自分の性的な欲望を見せないように距離を置こうとする。

まるでそうすることを恐れているように。

玖出のキスにそのまま身体を預けていたら、突然ドアを叩きつける大きな音がして、私達は驚いて顔を上げた。

副園長の大沼が燃えるような目で私達を睨み付けていた。彼だけがこの施設の中で、いつも必要以上の体罰を繰り返す。

男の引きつった表情には見覚えがあった。

まるであの時の母のような、冷たく燃える眼差し。

「ガキの癖に何やってるんだ！ お前ら！」

食堂につかつかとお入ってくると、大沼は玖出を思い切り平手で殴りつけた。

「やめてください！」

必死で止めに入ったが、いきり立った大沼は玖出のシャツの胸倉をつかむと、さらに何度も情け容赦なく殴りつけた。

玖出の綺麗な形の唇から赤い血が一筋流れ落ち、彼の白いシャツに真紅の滲みをつけた。

どんな時にも恐れを知らず、不適な笑みさえ浮かべている少年が、何か凶器を持つわけでもないこの中年の男の前で身動きがとれずにいることに驚いた。

「目を逸らすな。俺を見る」

大沼はそう言いながら玖出の髪を引き掴み、自分に無理やり目を向けさせた。

玖出を見つめながら乾いた唇を舌で舐めている。
まるで大きな禍々しい蛇のようだ。

大沼が唯一この施設で少年達ににらみをきかせられるのは、一番力のある玖出が彼に逆らわないからだ。

ようやく大沼を見返した玖出の目の中に恐怖が浮かんでいるのを見た瞬間、私は彼が心に抱えている大きな傷が何なのかを知った。

「やめて！」

大沼にしがみ付いたが、力の強い大きな男にかなう筈もなく、そのまま振り払われ、壁に打ち付けられた。

「愛美！」

「蔵木、お前はすぐに部屋に入れ。俺がいいと言つまで出てくるな」

彼が恐れている事が何であるのかすぐにわかった。
私達は、同じだった。

胸が切り裂かれるように痛み、涙が溢れる。

「玖出さん……」

彼は血を吐くように、唇から恐怖を搾り出す。

「逃げようと思ってても身体が動かない。何もかもあいつの言いなりだ。それどころか、俺は今日、自分からあいつに続けてくれと懇願したんだ……」

玖出の目から涙が流れ、彼の端正な頬を濡らす。

私達に何ができるというのだろう。

胸の十字架が焼け付くように痛んだ。

玖出は中学の卒業式の日、傷害事件で補導された。

大沼の刺し傷は深く、何ヶ所にも渡っていて、命を取り留めたのは奇跡だった。

玖出に対して丸二年の間行われていた性的虐待が明るみになり、施設に移る前に養父が彼に繰り返し返していた同じ行為も警察に言及された。

大沼は玖出を支配するために薬まで使っていたという。

玖出は更正施設に送られて心の傷を癒すはずだった。

そこで何があったのかはわからない。

彼はそこを出た後、二度と私の前に姿を現さなかった。

玖出の事件の後、血なまぐさい事件に怯えた園長や職員は次々とやめてしまい、なかなか次の管理者が見つからない施設は以前にもまして殺伐としていた。

玖出というボスがなくなった為に、少年達の暴力による権力争いは目を覆いたくなるばかりに酷くなり、そのためますます次の職員が決まらない。

高名なカウンセラーが何回か子ども達をカウンセリングしたが、自分の本音を話した子どもはほとんどいなかったと思う。

誰がどうしたところで結局日常は変わらない。

ならば、下手にかまわれて今よりもっと酷くなることを避けたいと思うのだろう。

ようやく決まった次の園長は児童心理学専門の平井という初老の男で、その世界では名前が通っている人物だったが、施設の子どもの達の生活よりも、定期的に催される会議や講演の方に強く興味があるようだった。

施設にいるときは園長室に籠りきりで、ほとんどの業務は副園長の寺田という中年の女が請け負っていた。

彼女もまた、児童心理学の本を書いているのだというが、施設内で厳しく子どもを叱責する姿には、愛情や理解はまったく感じられなかった。

他の無気力な大人たちは誰一人子どもに向き合おうとはせず、子ども達の酷い素行は黙認された。

こんな仕事で命を捨てることはないと言う職員の話を目にしたが、それも仕方がないと思う。

寺田ですら、年長の少年達には怯えた表情を見せる。

大人や世間に何かを期待するという事を、皆とつくに諦めていた。

施設の温度調節は以前にましておざなりで、薬箱には常備薬が切れている事が多くなり、私はちよつとした風邪や怪我が直りきらずに何日も高熱を出しては入退院を繰り返すようになっていた。

「あんな場所から早く愛美を出したい。俺が高校を辞めて働いて、なんとか基盤を作るようにすれば……」

玖出が施設にいなかった後、陸人はすぐにそう言った。

陸人や玖出が目を光らせていることができない以上、外部から、たとえ施設で一番の力を持つ少年を抑えたところで結果は目に見えていた。

ただでさえ、気での事件以来悪い意味で世間の注目を浴びているから、陸人が施設内の少年達と暴力事件を起こしたなどと表ざたになつたら大変なことになる。

陸人は華南中部でサッカー選手として華々しく活躍し、さらに強い慶京高校へと引き抜かれていた。

この高校での実績は、そのまま彼の輝かしい未来へと繋がるはずだ。

もし事件でも起こせば、それは高校退学のみならず、サッカー選手としての未来を断たれるのと同じ意味を持っている。

たとえ独立しても未成年である陸人が私をすぐに施設から引き取ることとは不可能だから、私が義務教育を終えて自分で働けるようになるまでは施設で暮らすことを避ける道はなかった。

「大丈夫よ。陸人が思ってるほど弱くないもの。それに、あと半年の辛抱だから。そしたらどこか住み込みの仕事を探せばいいわ」

私は陸人を心配させないようにそう言った。

本当は、自分の将来のことなど考えたことはなかった。

自分に興味を持つことがまったくできなかったのだ。

今の生活を変えたいとか、もっと健康な身体が欲しいとか考えもしなかったし、高熱を出して意識を失い目が覚めたときも、ああ、まだ生きているんだなとぼんやり思うだけだった。

無彩色の毎日が同じように始まり、終わらない夢のように繰り返される。

「陸人は絶対に高校をやめちゃだめよ。せつかく名前が知られてきてるんだもの。このままサッカー選手を目指して欲しいの。お願い」

玖出が施設を去った後、私はいつもその時一番力のあるものに抱かれていた。

それしかあの施設で自分を守る方法を知らなかったし、力の強い男に求められて逆らうことが怖かった。

それは少年であったり、カウンセラーや学校の教師であったりした。

これはお前の烙印だと私にクロスをかけた母の恋人の体温を、私はつきり思い出す。

あの日、私の裸足のつま先を染めた濃い朱の色は、そうしていつしか身体中を染めていくのだ。

施設に入ってから三度目の秋を迎えていた。

そしてその頃、私は宏章に出会ったのだ。

「愛美、そろそろ回診の時間だぞ。あと十分位したら病室に行くから戻っていなさい。あまり外にいちやだめだぞ」

晴れ渡る九月の秋空の下、病院の中庭でピンク色の雲のように咲いた可憐なコスモスを見ていたら、白衣を着た若い医師が廊下の窓からいつもの快活な声で私に声をかけてきた。

ひと月ほど前に風邪を引いて高熱を出し、肺炎を起こして入院していた私は、そのままずっと退院できずにいたのだ。

「はい。結城先生。ごめんなさい。お花がすごく綺麗だったから」

そう答え、沢山のコスモスの花の向こうにいる医師を見ると、彼は人懐っこい笑顔を浮かべ、私だけに聞こえるように少し声をひそめた。

「後で病室に山ほど持って行ってあげるよ。うるさい看護婦の目を盗んでね」

後ろについたベテランの看護師さんがちらつと医師を見上げて咳払いしている。

三十代の結城医師は、この病院の老院長の孫だった。

院長の一人娘がお嫁に行つて、代わりに彼がこの歴史のある大きな総合病院を継ぐのだと、他の患者が噂しているのを聞いた。

陸人が華南にいた時、唯一の友人だった少年の兄だということもあつてか、医師は自分の妹のように私に親しく接してくれていた。

手を振って歩き去った医師を見送り、ふと渡り廊下を見ると、中庭に面した大きなガラス戸の向こうに、一人の背の高い黒髪の少年が病棟へ向かって廊下をうつむき加減に歩いているのが目に入った。長めの前髪と日に焼けて整った横顔を、どこかで見覚えがある気がする。

デニムにラフな白シャツを着、肩に大きな黒いスポーツバッグを提げていた。

右手で綺麗な花束をわし掴みしているのだが、持ち手の部分は力が入ってしまったせいか、すでに包装紙が切れそうだ。

大人びてはいるが、おそらく私服の高校生だろう。

バッグについた大きな校章は華南のものだ。

鮮やかなブルーで華南学院サッカー部と書かれている。

それを見て、陸人が華南にいた頃、一緒に部にいた少年だと思い出した。

キレのある動きで目立つ、能力の高い選手だ。

彼がボールを受けるたび、見学の少女達が歓声を上げていた。

少年は思いつめたような顔で足を進めては立ち止まり、元来た方向に引き返してはしばらくするとまた振り返る。

不思議に思っただけでいると、病棟の方を見ていた彼が急に慌てて廊下の隅に花束を置き、急ぎ足でその場を去って行くのが見えた。

彼が姿を消すのと入れ違いに、病院のガウンを着た中年の美しい女性がぼんやりした表情で歩いて来て、廊下においてある花束にゆっくりと目を留めた。

花束を拾い上げ、あどけない少女のように嬉しそうな笑顔を浮かべると、花の香りを嗅ぐように繊細に整った顔を花束にそっとうずめる。

通りかかった看護婦が女の人を見つけ、少し慌てたように肩を抱くと、小さな子どもに言い聞かせるような表情で話しかけた。

女性は看護婦の存在にも気がつかないようにずっと花を見たまま笑顔を浮かべ、そのまま病棟のほうへ手を引かれて行った。

私は急ぎ足で渡り廊下への入り口をくぐると、歩き去った少年の姿を追っていた。

廊下の角を曲がると、広い待合室のホールに溢れかえった患者たちの向こうに、ポケットに手を突っ込み、足早に歩く少年の後姿が見える。

なぜ彼の後を追ってしまったのかはわからない。

私は今までそんな行動を一度も取ったことがなかった。

少年は大きなガラスのドアをくぐると足を止め、ふとこちらを振り返った。

私達が見詰め合っていたのはほんの一瞬だったと思う。

すぐに目を逸らし、病院を後にした彼の黒髪を、秋の風がさらりと揺らした。

” KIRISHIMA HIROAKI ”

花束を置いたその少年のバッグには、そう名前が押してあった。

「昨日またプロのスカウトに声をかけられた。このまま行けば卒業を待たずにプロ入りできるかもしれない。ユースの話はあるけど、できるだけ条件のいい所を選びたいんだ。愛美から遠くなりすぎるのも避けたいしね」

その夜、陸人は病室に入ってくると他の患者に迷惑をかけないように私のベッドの回りのカーテンを引き、枕もとの小さな明かりをつけるそう言った。

ベッドの横に椅子を引いて腰掛け、腕について起き上がった私を心配そうに見る。

「起きるなよ、愛美。遅くなってごめん。練習が遅くなった。慶京からここまでは遠いな。電車でちょうど二時間かかる」

「遠いところをありがとう。大丈夫よ。もう熱も下がったし。せつかく陸人が来てくれたんだもの、少しくらい」

「抗議は却下。もう消灯だから横になってなきゃだめだよ。子どもは寝る時間だ」

「一つしか変わらないのに」

四月生まれの陸人と三月生まれの私は、学年では一つだが二歳近く年が離れている。

私が文句を言うと陸人はわざと真面目な顔を作った。

「一つじゃないよ。十九センチも違う。俺と同じくらい大きくなったら大人だつて認めてやる」

「そんなに大きくなれるわけじゃないじゃない」

私が吹き出すと陸人も笑った。

まるで私を包み込んでくれているような、優しくゆったりとした陸人の笑い声の響きが好きだった。

陸人に触れられると、私は始めて自分の身体にも体温があるのだと感ずる。

「この間測ったら一八一センチあった。まだまだ伸びるよ。愛美なんか一抱えだ」

陸人は私の両肩を捕まえてそのままベッドに軽く押し倒し、間近から覗き込むと額に手を当てた。

「ほら。まだ微熱がある」

陸人のハスキーな囁き声が耳元で聞こえた途端、全身がカッと熱くなる。

私は陸人から眼をそらし、浅黒い長い指から逃げるように枕に顔をつけた。

陸人に対する特別な気持が何なのかを、この時私はすでにはつきりと知っていた。

「熱なんかない……」

声が震える。

兄が私の額に触れることなど当たり前だ。

それでも身体には甘美な熱がこもり、心臓がとくとくと早鐘のよ
うに鳴っている。

私は息をひそめ、目を閉じた。

陸人は会うたびに大人っぽさを増し、今では昔のほっそりとした
少年時代の面影を探すのが難しいほどだ。

高校一年の陸人は日本でも有数のサッカーの名門校、慶京の選手
として華々しい活躍をしていた。

最近の大きな大会でも最優秀選手になり、天才児と大騒ぎされて
新聞や週刊誌にまで名前が載っている。

けれど、その成功がどれ程の努力を伴うものかを知る人は少ない
だろう。

華南のサッカー部での二年間、陸人はほとんど学校の話は口にせ
ず、私が華南を訪ねることも許さなかった。

南米の激戦地で代表まで勤めたことがある父親の血を引く陸人の
実力は、回りの少年に比べ、あまりにも際立ちすぎていた。

眩いばかりの才能と恵まれた身体。

それ以上に特筆すべきは惜しみなく努力する彼の前向きな姿勢だ
った。

一人遅くまで練習を繰り返すのは虚栄や自己満足のためではない
ことを他の部員が知るはずもなく、嫉妬が彼を孤独に追いやった。

華南は名のある家柄の子ども達が通う事で有名な学校だったから、
特待生でサッカーを続ける施設出の陸人がどんな想いをしていたか
は想像に余りある。

それでも陸人は自分の辛さを口に出すことは決してなかった。

内緒で華南のコートを何度も訪れなければ、私は兄がそんな状況
にあることを知らないまままで終わっただろう。

陸人は私を幸せにしたいといつも言う。
でも、本当に幸せにならなくてはいけないのは彼のほうなのだ。
私は陸人にそう思われる資格などない。

「いつも愛美の事を考えてるよ。もう少しの辛抱だ。お前の為に必ずサッカーで名を上げる。いつか必ず一緒に暮らそう」

そう言うて、陸人は私の手を取り、握り締めた。

その夜はいつまでも眠る事ができなかった。

私はベッドから起き上がると病院の静かな廊下を歩き、手洗い場で水道の蛇口をひねった。

流れ落ちる水が指先を濡らしていく。

冷たい水が指先から感覚を奪っていくまで、私は手を浸し続けた。
私の中の罪深いものを洗い流す事ができたら。

病室を後にするときの陸人の後姿を思い出していた。
あのしなやかな背中にそっと身体を寄せ、滑らかな肌に口付けたらどんな気持ちだろう。

胸を締め付ける強い想いに耐え切れず、顔を伏せた。

私は実の兄を愛していた。

あの腕で抱かれたいのだ。

けれど、私は陸人を妹の顔で送り出す。

鏡に映る自分の顔を見ることができなかった。

そこにはきつと、母が言った通りの醜い顔が映っているに違いない。

私は嘘つきなのだから。

暗い病棟にともる蛍光灯の明かりの下で、私の涙がいくつもいくつも頬を伝い落ち、指を濡らす水の流れに押し流されていった。

私の微熱はなかなか引かず、結城先生は少し難しい顔をして聴診しながら「胸のレントゲンを取ってみよう」と言った。

「このままカルテを持ってレントゲン室へ行つて。写真を撮り終えたらそのままベッドに戻っていいよ。病室を出るときは何か暖かいものを羽織っていくこと。気分が悪くなったら誰でもいいから看護師を捕まえてそう言いなさい」

「はい」

私は頷くとベッドから起き上がり、はだけたガウンを直して医師に言った。

「先生、コスモスありがとうございます。すごく綺麗」

私のベッドの横には、満開のコスモスの大きな花束が花瓶に挿してある。

医師はにっこり笑って私に小声で囁いた。

「俺が花泥棒だなんてばらしちゃだめだよ。病院を首になったら路頭に迷うからね」

その表情がおかしくて、私もくすつと笑いを漏らした。

医師が私のベッドの周りを囲んだカーテンを開けると、優しい目をした快活そうな少年が壁に寄りかかってベッドの脇に立っていた。穿き込んだデニムと身体にフィットしたネイビーのパーカー。

日に焼けた肌と明るい色の髪をして、若い医師とよく似た顔立ちをしている。

「愛美、今日はどう？」

「結城さん」

少年は真っ赤な瑞々しい苺が入った白い紙の手提げ袋を差し出した。

「また何にも食べてないんじゃないかって陸人が心配してた。ってことで忙しいあいつに代わって俺がお見舞い。悪徳医師の魔の手からも守らないとね」

「わあ。嬉しい。いつもありがとうございます。季節外れなのに、大きな苺」

私は小さな子どものように大喜びして、結城から苺を受け取った。苺は私の一番好きな食べ物だと彼は知っていて、いつもこうしてお見舞いに持ってきてくれる。

「悪徳……。相変わらず口の減らない奴だな、怜。もう高二なんだから、そろそろ大人になって生意気を卒業したらどうだ」

少年の兄は嫌そうに顔をしかめてそう言ったが、口調とは裏腹に、その目は年の離れた弟への優しい愛情に満ちていた。

「兄貴が思ってるより、子どもにも苦勞が多いんだよ」

結城は大げさにため息をつき、それから私を見て微笑んだ。

「レントゲン室、俺が付き添うよ。こんなに可愛い子が一人で歩いてて、誘拐でもされたらどうするんだよな？」

肩にかけた黒いスポーツバッグをベッドの横に置いて、結城が責めるように兄を見上げた。

バッグにはこの間見た少年と同じ、鮮やかなブルーで華南の校章が付いている。

結城は実力のある華南サッカー部の中でも指折りの選手で、陸人とは随分親しくしていたらしい。

プライドの高い華南の生徒達の中で、施設育ちだと知っていながらまったく気にせず今も兄と付き合っている結城は、私にとっても親しみの持てる、頼りがいのある兄のような少年だった。

彼は陸人が慶京に移ってから、こうしてよく私を見舞ってくれる。

「どこかの誘拐犯よりお前が一番危なそうだ。いいか、ちゃんと行つてまっすぐ帰って来いよ」

「兄貴も看護師さんどっかに連れ込んで悪い事してないで、まっすぐ診察室帰れよ」

「お前……」

いつもながらの兄弟のやり取りがおかしくてしょうがない。同室の他の患者もくすくす笑っている。

この二人は人の気持ちを和ませる雰囲気を持っていた。重い病気の患者も結城医師と話す時には笑顔になる。

器用そうな指をした聡明な弟も、おそらく兄と同じ天性の医師の素質を持っているのだろう。

医師は外科医だったが、執刀がない日は外来患者も診察してくれる。

いったいいつ眠っているのかと思う程熱心な仕事振りには患者の信頼も厚く、評判も高かった。

私が施設の近くの小さな病院からここに移ることができたのも、結城が自分の兄に話をしてくれたからだ。

診察料は陸人の出世払いだから心配しないでいいよと医師は私に言った。

「間違いなく、三倍にはなって返って来るね。俺の投資だから愛美が心配する事は何もない」

レントゲン室に向かう病院の廊下を、私の歩調に合わせてゆっくり歩きながら結城が言った。

「陸人は今日も試合だよ。スカウトの見学も凄い数だ。たいした奴だよ。おかげで俺はきっぱりサッカーをやめられる」

「結城さん、サッカーは続けないの？」

「高校卒業まではやるよ。あと一年と少し、全力でね。でも、残念ながら俺は自分の限界が見えてるからね。陸人を見ると、そこに俺がサッカーに望むものが全てあるんだ。」

諦めじゃないよ。あいつの存在が俺を満たしてくれてるというか」

結城はそこでしばらく言葉を切って、それから言った。

「医者になって患者を助けたいと思うようになった。兄貴も爺さんもそれを望んでるし、レールが敷かれてるみたいで嫌だったんだけど、ここまで病院に出入りしてるというんなことを見るからね」

私は頷いた。

結城はきつと彼の目指す医師になり、沢山の人の命を救うのだから。

その姿が見える様だった。

いくつかあるレントゲン室のドアの前で順番を待つ患者達の中に、看護師に付き沿われた女性がぼんやりした表情で車椅子に座っているのに気がついた。

この間の少年が置いた花束を拾ったあの――。

透き通るような青白い肌と重い病気の患者に特有のやつれた顔立ち。

頭に被っている柔らかなスカーフが、この女性の病気がどんな種類のものであるかを物語っていた。

細い腕に射した点滴の管が痛々しい。

「こんにちは。あとで病室に伺おうと思ってました」

声を掛けられた相手が認識できずに虚ろな目を向けたその女性に、

結城は優しく声を掛けた。顔見知りの様だった。

「いつも綺麗ですね」

その言葉を聞いた女性の顔に、少女のようにあどけない微笑みがゆつくりと広がった。

小さな子どものような心に戻ってしまっているこの女性は、綺麗だと言われたことが嬉しいのだ。

その言葉はきつと、彼女の心の何かに優しく触れるのだろう。

「一ノ瀬さん、中へどうぞ」

レントゲン室が開き、技師が声を掛けた。

看護師が幸せそうな笑みを浮かべたままの女性にいたわるように声をかけ、車椅子を押してレントゲン室に入って行く。

一ノ瀬――。

あの少年の苗字と一緒にではないのが意外だった。

病気の母親を見舞っていたのだと思っていた。

今の女性の顔立ちには、どこかあの少年の面影がある気がしたからだ。

「結城さん、あの女の人を知ってるの？」

黒髪の少年のことが、何故だかずっと気にかかっていた。

「この間、結城さんと同じサッカー部のバッグを持った人が花束を持って渡り廊下を通るのを見たの。その人はあの女の人姿を見ると、花束を置いて慌てて帰って行ってしまった」

結城は少し驚いた顔で私を見た。

「花束？ あいつ、見舞いに来てたんだ」

「きりしまひろあきってバッグに名前が押してあった」

「そいつは俺の幼馴染で、あの人は奴の叔母だよ。俺らは昔、よくあの人の家に遊びにいったんだ。当時は結婚してて子どももいたんだけど、二人とも一年半前に事故で亡くして。優しい人で、子どもが見てもうつとりするような美人だったよ」

「ずいぶん悪いの？」

結城はしばらく黙ってから静かに言った。

「脳に取り除けない大きな腫瘍があって、今では昔の事がほとんど思い出せない。痛み止めの薬を大量に投与してるから、あの通りだよ。なんとか命をつないでる」

すぐに言葉を返せなかった。

迫りくる死を待ち受ける恐怖を知らずにすむのは幸せなのだろうか。

あの少年の叔母――。

花束の包装紙が切れそうなほど強く握り締めていた、彼のあの思いつめた表情。

「蔵木さん、中へどうぞ」

技師がドアから顔を覗かせた。

「ほら、愛美の番だよ」結城が私にそう言つと、安心させるように背中をそつと叩いた。

私はまた軽い肺炎をぶり返していることがわかり、少し退院が長引いた。

入院している時が私にとって一番よい環境にある事を陸人は複雑な表情で認めていて、とにかく治りきるまでお願いしますといつも結城先生に頭を下げていた。

それから何日か経ち、点滴が外れてベッドから起き上がれるようになる、私は自分の棚に置いてあるスケッチブックを取り出して窓から見える中庭に揺れるコスモスを白い紙に写し始めた。

絵を描くことが好きだった。

言葉で自分の心を表すのは昔から苦手だ。

母が何日も家に帰ってこない時は、紙と鉛筆を持っていろいろなことを想像して過ごした。

美しいドレスやお城、沢山の花の中に陸人と私が手を繋いでいるところ。

けれど、今まで父母の絵を描いたことは一度もない。

小さな頃、学校で家族と自分の絵を描きなさいといわれた時、どうしても描くことができずに、私は白い画用紙に白いうさぎの絵を描いた。

昔、母が陸人と私を一度だけ移動動物園に連れて行ってくれたことがある。

その日の母は穏やかで、優しかった。

柵で仕切られたふれあいコーナーの中に小さな白いうさぎを見つ

け、陸人が捕まえて私にそつと手渡してくれた。

柔らかく、ふわふわしたうさぎは逃げようとせず、私の腕の中で小さく震えている。

「うさぎさん、どうして震えてるの？」

珍しく、私たちが遊ぶ姿を椅子に座ってずっと見ていた母がしばらくして答えた。

「人間が怖いだよ」

暗い小さな檻に入れられた動物達はとても悲しそうに見えて目を合わせるのが怖く、私はずっと陸人の後ろに隠れ覗き見ていた。

檻の中をただ行きつ戻りつしている毛艶の悪い鹿は、柵に身体を何度もこすり付けているところの毛が剥げ落ちている。

鉄の柵を掴んだままずつとこちらを睨み付けている大きな黒いゴリラ。

死んだように寝そべっているかと思うといきなり起き上がって恐ろしい咆哮を上げるライオン。

「威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。そうするのは、本当は弱いからなんだって……」

陸人は言った。

怒っているのは悲しい気持ちで一杯だからなんだ。

動物は泣けないからああして怒るのだと、ぼんやり考えた記憶がある。

ある時期から、陸人は私にも涙を見せなくなった。

傷ついた心は彼の身体の奥深くに封印され、それすらわからないように傷の周りを覆ってしまった。

誰もその傷に触れ、癒すことはできないのだ。

泣くことができない動物達の姿を思い出すと、私は今でも胸を締め付けられる。

悲しみを怒りに変えることすらしなければ、その想いはいつたどこへ行くのだろう。

それはいつか全てを脆く崩してしまうのではないだろうか。

ふと気がつくと、あの日見た少年の横顔を描いていた。

陸人以外の人を描いたのは初めてだった。

「愛美は本当にいい絵を描くなあ」

結城先生がいつの間にかベッドの傍に立っていたのに気が付き、私は真っ赤になって慌ててスケッチブックを閉じた。

「絵を描ける才能に憧れるよ。俺は全然だめだ。どうも描きたいことが紙に収まりきらなくて、机にまではみ出してしまう。子どもの頃は仕方ないから画板ごと提出したよ」

「そついうの、素敵な絵だと思います」

画板ごと絵を出されて戸惑っている教師の顔が思い浮かんで吹き出した。

「愛美の絵には対象の背景が見える。そこに描いてある彼の想いかね」

「私、この人を知らないんです。何度か見かけただけ」

なぜか頬が赤くなった。

医師はしばらく私を見てからさりげなく言った。

「その絵の彼にそっくりな子がその面会室に座ってるよ。俺が呼んだ時間より随分早くから来てるんだが中々仕事のきりがつかない。もう少し待ってくれるように誰かが言ってくれと助かるな」

待合室は珍しくほとんど人がいなかった。

平日の午後のせいだろうか。

この病院は病棟が七階まであり、フロアーごとにこうして明るく清潔な面会室があるので、見舞いに来る人が後をたたない。

入り口からそつと覗くとあの少年が椅子にもたれて長い足を投げ出している後姿が見える。

私は胸の動悸を深呼吸で抑えてから中に入り、彼に近づくと後ろから声をかけた。

「あの……」

その後、どうやって言葉を繋いだらいいのかわからず沈黙していると、少年が振り返って私を椅子から見上げた。

伸びかけた黒髪が、端正な顔立ちを引き立てている。

日に焼けた肌に洗いざらしたチェックの綿のシャツと、デニムがよく似合っていた。

私が何も言わずに立ったままでいたら、表情を変えないまますぐに目を逸らしてしまう。

意外な反応に戸惑っていた。

男の人に自分から声をかけたのは生まれて初めてだったが、こんな態度を取られたのも初めてだ。

いつも緊張するほど見つめられてしまうから、知らない男の人が苦手だった。

特に母の恋人と関係してからは、男の人たちが私を見る目が明らかに変わっていた。

仕事に出かける時の母を見る男の人達のように、独特の熱を帯びた目で舐めるように見つめる。

私がどんなことをしているのか見透かされているようで怖かった。

少年の態度でふっと身体力が抜けた。

私はもう一度少年に話しかけた。

「すみません。結城先生から伝言を預かってきました。あと三十分くらいかかるそうです」

少年はもう一度私を見て、「どうも」と一言言った。

そしてまた沈黙。

彼は私を無視したまま手にした本を読み始めた。

「隣に座ってもいいですか？」

自分の言葉にも驚いた。

これは私が言っているのだろうか。

微かに頷いた気がしたので、私は少年の横に腰を下ろした。

気持ちのよい秋晴れの日で、少し開けた窓から時々静かに吹き込む風が少年と私の髪を揺らす。

私達はただ黙って座っていた。
部屋の向こうで、穏やかに話している他の患者と家族の声が聞こえる。

熱心に本を見ている少年に私は聞いた。

「その本面白いですか？」

少年はちらつと私を見た。

「まあね」

「もし私がここにいるとお邪魔なら……」

最後まで言い切らないうちに、うつむいて本を読んだままの少年がぶっきらぼうに言った。

「別に。邪魔じゃない」

私達はそれきり言葉を交わさず、二人で並んで座っていた少年が手にしてる本は、ずっと逆さのままだった。

自然と笑みが浮かんでくるのは窓から差し込む午後の柔らかい日差しのせいだろうか。

本を読む少年の隣で、ほんのりと幸せな気持ちに満たされたまま、窓の外に見える中庭のコスモスに目を向けた。

少年にはそれきり会うことはなかった。

退院の日、面会室の前を通りがかり、ふと彼が座っていた椅子に目をやった。

彼は花束をあ的女性に渡すことができただろうか。

あの後、あの女性のことになって一ノ瀬という名前を頼りに最上階にある特別室を探しあてたが、そこには数日前から面会謝絶の札がかかっていた。

「二週間後にもう一度様子を見せて。薬は忘れずに飲むこと」

最後の診察の時に結城医師はそう言って看護師に予約日の指示をすると、回転する椅子をこちらに向け、大きな机に肘を突いて真面目な顔で私を見た。

「施設に戻っても無理は厳禁だよ。愛美はもつと自分に興味を持たなくちゃだめだ」

看護師が書き込んだカルテを持って出て行き、柔らかい白と薄いベージュで統一された診察室には二人きりだ。

「俺は悪徳医師だから、自分がそうしたい時には患者に個人的な情を持って、妹のように思うのも平気なんだ。まだこんなに若い可愛い女の子が明日の話をまったくしないことがやりきれないんだよ。傷ついた小さな子ども達をさらにいたぶるような世の中に反吐がで

る。

もし、愛美があそこを出て違う所で暮らしたければ、いつでも力になる。遠慮しないで言って欲しい」

私は診察室の椅子に座ったまま、首を振った。

「いいえ。私はあそこにいます。母が……」

なぜ母という言葉が出てきたのだろう。

「母が迎えに来てくれた時、私がいないと悲しいと思うから……」

言葉が空虚に響いているのはわかっていた。

母が私を迎えに来ることなどありえない。

あの施設の子どもは皆それがわかっていた。

それでも小さな希望を捨てることができず、施設でその日を待ち続けるのだ。

父や母が自分を迎えに来て、これは全部間違いだった、本当はお前を愛しているのだと抱きしめてくれる日がくることを。

医師は小さくため息をついた後、真剣な口調で私に言った。

「もし何かあったら、必ず俺に言うんだよ。自分でどうにかしようとは絶対に思わないこと。わかったね？」

「はい」

私は答えて立ち上がった。

「ありがとうございました。結城先生」

頭を下げて診察室のドアを押す。

医師が心配していることが何なのかわかっていた。

私が望まない妊娠をすることを恐れているのだ。

その時の私にとって妊娠は漠然としたものでしかなかった。

自分が新しい命を宿すことができる身体だと思うことが難しくもあつたし、子どもが私を母親として選ぶことなどありえない気がした。

だが、私はいつも誰かに身体を求められていて、相手が私をそんなに扱うことも多いのだ。

おそらく、私が誰にも心を開かないからだろう。

何をされようと反応せず、黙って横たわったままの私に、男達は強く苛立つ。

施設に戻ったその夜、自分の部屋に入ろうとした私に一人の少年が近づいて来て腕を強く掴んだ。

赤く燃え立つ髪の色は、彼の性格そのもののようなのだ。

耳のピアスと顔に残る細い傷跡が、年よりも大人びた雰囲気さえに強調している。

陸人がいた頃から、気の荒さと言動で何度も警察の手を煩わせていた一つ年上の少年だった。

何度も施設を飛び出していたが、暴力団に目をつけられて身辺が危なくなつたため、ほとぼりが冷めるまで施設に身を隠しているという噂を聞いた。

「愛美、随分長い入院だったな。お前の帰りを首を長くして待ってたんだぜ」

川崎颯という名前のこの少年の顔立ちと雰囲気は、母の恋人を思いう出させる。

「離して」

私は手を振り払い、身体を離れた。

川崎がいつも私を目で追っていることは知っていたが、会話すら、ほとんど交わしたことがなかったのだ。

施設の少年たちの間ではまた争いがあったらしく、男子寮の一番広い一部屋を実質的に独占している川崎が、今のリーダーであることは明らかだった。

すなわち、川崎が私を手にする権利を手にしたということでもある。自分を拒んだ私に怒りの目を向けると、少年は言った。

自分を拒んだ私に怒りの目を向けると、少年は言った。

「玖出ならよくて俺はだめかよ！」

まるで世の中の全てを憎んでいるようなその眼差しが、母の恋人を思いう出させるのだと気がついた。

「玖出さんは何もしなかったわ。あなたとは違う」

私は川崎をきつく見返してそう言った。

あの夜私を抱きしめて泣いた彼の姿を思い出す。

「嘘をつくな！ 俺が騙されると思うなよ！ お前は選べる立場じゃねえんだよ。お前を欲しいと思った奴がこのボスになる。ただ黙って従ってればいいんだ」

川崎は私を壁に強く押し付け、腕で押さえつけると身体を触りだした。

施設の他の少年が廊下を通りがかったが、すぐにうつむいて足早に通り過ぎていく。

「やめて！」

私は壁に身を寄せる様に身体を捻り、はだけた服を掻き合わせて自分の身体を隠した。

「抵抗すんなって言ってんだろ！ お前みたいな女が今さらなんだよ。お前がやって来たことを兄貴にしゃべってもいいんだな！」

川崎はついに恐れていた言葉を口に出した。

いつかは言われると覚悟をしていたのに、動揺を押さえられない。

言葉を一つも言い返せないまま、私は川崎から眼を逸らした。

陸人が施設を去ってから私がして来たことを、絶対に知られたくない。

川崎は、私がそれを恐れていると感じている。

男子寮の廊下では、指導員にすらすれ違わなかった。

身体から力が抜けた私を無理やり部屋に連れ込むと、川崎はベッドに座って背もたれに身体を預け、煙草に火をつけながら目を上げて言った。

「脱げよ。あいつには見せてたんだろ？」

玖出に対して特別な感情があるようだった。

玖出が去った後、他の少年達が私にして来たことを知らないはずがないのに、川崎は玖出だけを意識している。

「お前がいない間に学校の担任からは充分金をいただいといた。出世コースまっしぐらの教師の癖に、教え子に無理やり手を出すなんてふざけた奴だぜ。この不景気の中に淫行教師の烙印押されて教職失ったらどうにもなんねえもんなあ。自分の女房がくたびれ果てた大ブスのババアじゃお前見て狂っちまうのもしかたねえけどよ」

私が教師に関係を強要されていることを、なぜ知っているのだろう。

それを強請のねたにしている。

回りの少年から社会人にまで、川崎は恐喝の手を広げていたのだろうか。

果然と川崎を見返した。

川崎は大きく吸い込んだ煙をゆっくり吐き出しながら、私を威嚇するように目を眇め、低い声で言った。

「お前を使つて稼ぐこともできるんだぜ？ その辺の腹の出た油くせえ親父にとつかえひつかえ犯られるのは嫌だろ。お前が俺を飽きさせなかったら小遣い稼ぎの道具にはしないでやるよ」

窓の外では、雨が強く振り出していた。

私は川崎の目の前で、言われた通りに身にまとっていた服を全て脱いだ。

そのまま川崎を真っ直ぐに見つめる。

しばらく動きを止めて私を見ていたことに気がついた川崎が、少し動揺したように視線を逸らした。

燃え尽きそうになっていた煙草を空き缶に捨て、彼はそのまま咳くように言った。

「来いよ」

裸の私を抱きしめた時、大人の男のように振舞っていた少年の身体が少し震えているのに気がついた。

彼が私に触れたのはこの時が始めてだった。

素肌が触れあうと、川崎は自分を抑えきれないように私を組み敷いた。

屋根を打ち付ける雨の音が、暗い部屋でギシギシと鳴るベッドの軋みを押し流していく。

壊れた雨どいを伝ってコンクリートを打つ水滴の音が、アパートの水道からいつまでも漏れ落ちる水の音を思い出させた。

「もっと嬉しそうな顔しろよ。全然感じねえのかよ。あいつにはどんな顔を見せたんだ」

川崎は私を抱きながら途切れ途切れに言った。
汗が身体を伝う。

「あいつが今でも好きなのか。あいつだけが特別なのかよ！」

その言葉で、彼が私と玖出の間にあつた感情に嫉妬しているのだと知った。

確かに、他の少年達にはない気持ちを、玖出にはほのかに持っていたかもしれない。

川崎は、私が玖出に恋愛感情を持っていると思っているのだ。

私が施設に入った時、一番最初に会ったのが川崎だったことを思い出した。

私を驚いたような目で見つめ、まだ顔に幼さの残る少年は言った。
——ここはお前みたいな奴が来るとこじゃねえよ。早く親のころへ帰れ——。

「……お前はあばずれだ。誰にでも抱かれるあばずれ女だ。これが当然の仕打ちなんだ」

川崎が苦しげに囁き、両腕で私を強く抱きしめた。

言葉とは裏腹に、少しでも私を離したくないかのように。

……——威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。そうするのは、本当は弱いからなんだって——……。

一人でも生きていけると虚勢を張りながら、私達はこの施設の屋根の下で身体を寄せ合っている。

お互いに触れないように、目を合わせないように距離を置きながら。

誰かに愛して欲しくとも、その方法を知らない。

思いを遂げた後、私の身体に押し掛かったままいつまでも顔を上げない川崎にそっと腕を回すと、彼は傷口に触れられた様に、ビクッと身体を震わせた。

傷つけることでしか相手に触れられない少年。

「お前が悪いんだ。お前が……」

小さく呟く少年が泣いているように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0395z/>

クロス

2011年12月3日20時58分発行